

市役所に着き、『少子化対策推進課』を探した。

5階にあるようだったので、エレベーターで向かうことにした。

『少子化対策推進課』と書かれた場所の受付には若い女性が座っていた。

一瞬躊躇したが、桐島は勇気を振り絞り、受付ナンバーを取り、順番を待った。

待っている人が誰もいなかったなので、すぐに呼ばれ、受付に向かった。

女性は事務的に実務をこなし、奥の部屋へ進むように案内してきた。

501号室と書かれた部屋に入った。

部屋の中はベッドやテーブル、椅子といったものが置かれ、トイレやお風呂などの水回りが完備されており、

まるでビジネスホテルのような空間だった。

椅子に座り、童貞カウンセラーを待った。

『童貞カウンセラー』とは童貞の男性が女性に慣れてもらうことをサポートする役割を果たし人のことを指す。

30年前から始まった立派な仕事であり、国家資格を要する資格だ。

弁護士や医者などと並んでなかなか取得することができない難関資格の一つだ。

25歳を超えた男性の元に国から通知が届き、童貞の男性は童貞カウンセラーのカウンセリングを受けることができる。

もちろん権利を行使しない男性がほとんどだった。

童貞でない男性が、カウンセリングを受けて万が一バレた場合処罰の対象となるからだった。

それ以前に童貞であることを申告しなければならず、たいがいの男性は恥ずかしくて市役所に通うことはしなかった。

なので、童貞カウンセラーにカウンセリングを受けるのは本物の童貞ばかりだった。

桐島もその一人だった。

現在28歳の桐島は過去に3度通知が来ていた。

今までは怖くていけなかった。

原則的にカウンセリング内容は非公開であり、カウンセリングの感想をあげるなどの行為は禁止となっている。

何の情報もなかったが、知り合いの男性から噂を聞き、今回行くことに決めた。

その人は10年前にカウンセリングを受け、現在は結婚を果たしていた。

その人いわく、「まるで女優やモデルさんのような綺麗な女性だった」話していた。

嘘をつくようなタイプの人ではないので、信じることにした。

桐島はしばしカウンセラーを待った。

ノックとともに女性の声が出た。

透明感のある声色で、声だけで美女を想像することが容易だった。

「はじめまして。童貞カウンセラーの筒井葵と申します」

桐島は反射的に立ち上がり、お辞儀をした。

小柄な桐島よりも高い身長 of 彼女は、かっこよくタイトスカートのスーツを着こなしていた。

美人社長秘書のような仕事のできる女性に映った。

葵は名刺を差し出した。

紅茶の水女子大を卒業後、童貞カウンセラーの道に進み、現在は自分の事務所を構えているようだった。

東大などが官僚を多く輩出していることで有名だが、紅茶の水女子大は優秀な童貞カウンセラー輩出することで

有名な女子大だった。

桐島は筒井葵のあまりの美しさに呆然としてしまった。

172センチ 92・58・90、股下90センチ、Hカップ。

名刺に書かれたプロフィールにはそう記されていた。

桐島は生唾をこぐりと飲んだ。

日本人とは思えない抜群のプロポーションを誇っていた。

お互いに挨拶を終え、早速カウンセリングに入る。

「160センチくらいで、体重は52くらいです、たぶん」

桐島は質問されたことに答えていく。

「ちなみに女性とお付き合いをされたことは？」

「ありません」

「風俗などに行ったことは？」

「ありません」

質問に答える間、桐島は視線のやり場に困った。

ブラウス越しに大きく張り出した胸や、丈の短いタイトスカートが気になって仕方なかった。

普通の女性だったら気にならないが、目の見張るほどのスタイルを誇る女性なので、どうしようもなかった。

「SかMかどちらですか？」

「えーと」

「恥ずかしがらなく大丈夫ですよ」

葵がにこやかに微笑んだ。

「Mだと思います」

「ソフトですが、それともハードですか？」

「そうですね」

桐島は困惑した。

「普段見てるアダルトビデオから判断してはどうですか？」

「えっと」

「もしよろしければ、DVDのタイトルを言っていただけたら、こちらが判断いたします」
さすがに恥ずかしかったので、ソフトMということにしておいた。

「ありがとうございます」

一通り質問を終え、葵は上着を脱いだ。

それだけのことなのに桐島の鼓動が早くなっていく。

「童貞カウンセラーにはいろいろなタイプがありまして、コミュニケーションを重視するタイプ、

ラブコミュニケーション、いわゆるエッチな行為を重視するタイプがあります」

葵は話を続ける。

「私どもの事務所が推奨しているのが、ラブコミュニケーションの方でして、そのあたりをご理解

いただけたらと思います」

葵の話では、もし不都合があるなら、カウンセラーを変更することが可能などいう。

「いつでも変更可能なので、気軽に声をかけてください。私でもいいですし、電話の方で「少子化対策推進課」に

電話していただければ簡単に済みますから」

人生で重要な体験だからこそ納得の行く形でカウンセリングを受けてほしいという意図があるという。

その成果は出ており、ここ20年で出生率が飛躍的な上昇を遂げていた。

国をあげての少子化対策が見事成功を収めていた。

「では早速ですが、ハグをしましょう」

桐島は促されるまま立ち上がる。

「緊張しなくて大丈夫ですよ。さあきてください」

葵は笑顔で両手を広げていた。

ためらいながらも桐島は足を踏み出していく。

葵との距離が縮まる。

甘い香りが鼻腔をくすぐる。

「腕回してください」

桐島は誘導通り葵の身体に腕を回した」

「いっせいのおで、で、一緒に抱き合いましょう。準備はいいですか？」

ただ抱擁するだけなのに、心臓の鼓動が激しさを増していく。

「いきますよ。いっせいのおで、ぎゅっ！」

初めての感覚に桐島は声も出なかった。

身体全体に女性を感じ、桐島は夢見心地だった。

小柄な桐島の顔のすぐ下にはHカップの大きな胸があった。

少しかがめば、顔をうずめることができる。

考えた瞬間、桐島の肉棒が一気にせりあがった。

さきほどまで緊張で収縮していた股間が元気を取り戻した。

「どうですか。はじめての女性の感覚は？」

「やわらかいです」

桐島は声を絞り出す。

「私も気持ちいいです。抱き合っているとなんだか安心しますよね」

葵の言う通り、抱き合っているだけですべての疲労が飛んでいくのような錯覚に陥る。

身体がとても軽くなっていく。

「桐島さん、おちんちん固くなってますよ」

葵がくすくすと微笑んだ。

桐島が下半身を引こうとすると、葵が制してきた。

「大丈夫ですよ。自然な感じで抱き合いきましょう」

「す、すみません」

「謝ることないです。興奮してもらって私も嬉しいです」

しばらくまったりと二人は抱き合った。

「桐島さんはおっぱい好きですか？」

「・・・好きです」

「おっぱいに顔うずまたいですか？」

桐島は上を向き、葵に向かって頷いた。

葵は桐島の頭をぎゅっと大きな胸に押しつけた。

はじめての胸の柔らかさに桐島の肉棒がさらに肥大していく。

「おちんちんビクンビクンなってますね」

今までにないほど肉棒が隆起していき、我慢汁がとめどなく湧き出てくる。

「これが女性のおっぱいですよ」

「すごいです」

葵が小さく笑った。

「感想が子供ですよ」

「本当にすごいです」

葵が強弱をつけ、胸の圧迫を操っていた。

「ぎゅっとしたり、ゆるめたり、そしてまたぎゅっとしたり、ふふ、かわいいです」

桐島は葵の意のままに操られ続けた。

「ふふ、よだれ出てますよ」

葵のブラウスによだれが付着していた。

すべての力が抜け、頭がぼーとしてきた。

「いっぱい感じてくださいね」

ただ肉棒だけは強固な堅さを誇っていた。

「桐島さん？」

「ふあい？」

「このおっぱいでおちんちん挟んだらどうなっちゃいそうですか？」

小悪魔的な声音で葵が言った。

「どうですか？ 私のHカップの柔らかいおっぱいで桐島さんのおちんちんを挟んじゃうんです」

想像をかき立てる。

「おっぱいの谷間におちんちん挟んで、パイズりするんです」

このマシュマロのような柔らかいおっぱいで射精してみたい。

桐島の脳内は葵のパイズリの妄想でいっぱいになっていく。

「絶対気持ちいいですよ。たぶん10秒もたないんじゃないかな」

葵は両胸を持ち、桐島の顔はパイズリしはじめた。

「おちんちん暴れ回ってますよ。そんなに気持ちいいですか」

「ふあい」

「ふふ、もっと感じちゃってくださいね」

桐島は少しでも近く葵の身体を感じていたい一心で、葵の身体を強く抱きしめた。

「どんどん積極的になっていいですからね。今日は理性のリミッター外しちゃいましょう、ふふ」

葵の言葉がきっかけとなり、桐島の理性が崩壊した。

これまで太もものに軽く当たっていた桐島の肉棒。

極力近づけないように頑張ってきたが、もう限界だった。

葵を強く抱きしめ、太もものにそそり立った肉棒を擦りつけ、必死に腰を振った。

桐島は我を忘れ、はじめてオナニーしたあの頃のように夢中で肉棒を刺激していく。

「そうです、そうですよ。私の身体に夢中になってください」

「ううう」

「オナニーでは感じることでできない快感を味わってください」

葵の言葉は桐島の耳には届いていなかった。

ズボン越しに膨張した肉棒を、桐島は必死に太ももの間にねじ込んでいく。

今の桐島には葵の身体はただの快感を得るための道具でしかなかった。

普段の桐島では考えられないほどの乱暴さで女性に自らの肉棒を擦り続けた。

葵はそんな桐島をサポートしようと冷静に桐島の身体支える。

童貞カウンセラーの仕事で、彼のようなケースは珍しいことではなかった。

むしろ桐島の行為は可愛いものだった。

もっと乱暴な行為を行うものも希に存在した。

彼の行為はただおちんちんを服越しに擦りつけているにすぎなかった。
必死におっぱいにしがみつき、腰を振る桐島が葵には愛おしく思えた。
桐島の息が上がってきた。

「もう射精しちゃいそうかな？」

長年の経験で童貞の射精のタイミングがわかるようになった。

童貞は急に射精感が襲ってくるが多かった。

「遠慮しないで出していいからね」

葵はつとめて優しい声で言った。

「いっぱい射精していいからね」

桐島自身には届いていなくても、彼の身体には伝わるように優しく促していく。

女性の前ではじめて射精する瞬間を最高の思い出にしてほしいと願う葵の気持ちだった。

桐島が葵の身体をぎゅっと抱き寄せた。

彼の射精するサインだと葵は判断した。

「いいよ。射精していいですよ」

絶妙なタイミングで言葉のアシストを加える。

童貞でソフトなM男には最適な方法だった。

「ああああ」

葵に操られてるように、桐島の肉棒から大量の精液が噴き出した。

一瞬にしてパンツの中が洪水となり、ズボンまで精液が染み出していく。

あまりの快感に桐島の身体が小刻みに震える。

そんな彼を葵は優しく抱きしめ、頭を軽く撫でる。

全身汗まみれの桐島は、徐々に息を整えていく。

葵のブラウスが桐島のよだれと汗がべとべとだった。

「いっぱい出ましたね」

桐島はふと我に返った。

ここ数分間の記憶がなかった。

下半身を見ると、ズボンが精液まみれとなっていた。

射精したのか。

それ以外考えられなかった。

恥ずかしさで葵の顔が見れなかった。

理性を失い、自分の性欲をぶつけてしまった。

童貞カウンセラーの筒井葵の優しさに甘え、今日会ったばかりの女性に

性欲をぶつけてしまった。

自分はなんてことをしてしまったんだ。

後悔の念が桐島を襲った。

気がつくと、桐島は市役所の外に出ていた。

手には鞆を持っており、葵の元から逃げてきたようだった。

桐島は頭を抱えた。

恥ずかしさのあまりその場から逃げてしまった。

勝手に射精して、勝手に部屋から出てしまった。

桐島は自分が恐ろしくなった。

雨雲から滴がぽとりぽとりと降ってきた。

そしてすぐに土砂降りとなった。

桐島はそのまま重い足取りで市役所をあとにした。